
ミサカとミサカと一方通行

ぢいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミサカとミサカと一方通行

【Nコード】

N1202N

【作者名】

ぢいる

【あらすじ】

打ち止めとミサカが見ていたテレビCM。そこに行きたいと一方通行に頼み

「あアン？ 外に連れてけだど？」

一方通行がソファで横になっているその前で、テレビに齧り付きで二人仲良く並んで食っているように見入る成長の違いがあるが同じ容姿少女が二人。

黄泉川の家で三人は暇を持て余し、ある意味三者三様な時間を過ごしていた。

超機動少女カナミンの途中に流れたCMのとある場所の花鳥園。そこには花々が咲き乱れ、多種多様の鳥が舞ういかにも楽しそうな場所。

「うん！ ここに連れて行って欲しいなあって、ミサカはミサカは画面を指しながら上目遣いをお願いしたりしてみたり」

一方通行の方に振り返り、目をキラキラさせて返事をする打ち止めと、

「貴方は扶養義務者として、打ち止めの願いを聞かなければならないと、ミサカは懇切丁寧に解説します」

下位固体ではあるが、幼い打ち止めが可愛い姉妹達シスターズの一人のミサカ。

花鳥園に大変な興味を持った打ち止め。容姿は幼いけれど、上位固体として姉妹達を統括する管理者。また容姿と共に他の姉妹達と

違い精神年齢はまだ幼い。だからこそ私達ナンバーズよりも、素体であるレベル5序列第三位の御坂美琴お姉さまの少女趣味(?)が色濃く反映しているのでしょう。

「懇切でも丁寧でもねエよ！ 大体、オマエ…… あアー何号だったか、まア、そんなこたアどうでもイインだけだよ。なんで、この俺様がそこまで面倒見なきゃならねんだ？」

「同じ説明を二度させようとするレベル5序列第一位と呼ばれる学園都市最高の頭脳を持つ一方通行のド無能ツぷりに落胆しつつ、一度聞いた番号を覚えられないことにミサカはコイツを過大評価したと、あからさまな溜息を吐いてみます。ちなみに10385号です」

「セエンだよオ！ 何で俺様がンなお前様の番号ごとき大事な記憶野を割いてまで覚えて差し上げなきゃなんねエンですかア？ オイ、打ち止めア缶コーヒー取ってくれ」

「はい！ と、いい子を装って連れて行って貰う確立を、少しでも上げようとミサカはミサカは画策してみたりして」

トテテテ……！

「つーかよオ、なんで居るんだ？ オマエ」

「ここに来たとき説明したじゃないですか。と、記憶薄弱な一方通行に覚えとけやクソ野郎と心の中で舌打ちしつつ、もう一度説明をします。私の体の調整や検査などで冥土返しから呼び出しをされたのですが、諸般の事情により相当時間がかかるとの旨、宿に困っていた私に、芳川がここを進めてくれたと、ミサカは面倒くさいと思いつつも諦めます」

「あーそういえば芳川がんなことイって気がすんなア」

ソファーに横たわったまま面倒くさそうにガシガシと頭をかく。

「はい！ 持ってきたよ」

とーー！ ドン！

「ツテエ！ コラ、テメエ様はなアにしゃがります。打ち止めアサ
ンヨオ!?」

突如飛び込んだ打ち止めを睨みつけるが、当人は何処吹く風で一方通行のブランド物の服を引っ張って行こう行こうとお願いを続ける。

「そんな顔しても怖くないの。一方通行は優しいから連れて行ってくれるとミサカはミサカは期待したりしている」

チツ面倒くせエ… と悪態を付き、受け取った缶コーヒーをテーブルに置き、代わりに杖を取って玄関に向かって歩き出す。

「ああああ…… 一方通行が願い虚しく何処かへ行ってしまうのと、ミサカはミサカは失意体前屈」

「こんな幼い子に何て酷いと、鬼、悪魔、鬼畜、外道、白、アスパ
ラ、兎、腐れ知恵遅れ、ミサカネットワークMNW切ってやろうか？ と、ミサカはフ
アッキン一方通行に一方的な罵詈雑言」

「なアに打ちひしがれてんだクソガキ、そのナンとかってトコ行き

てエンじゃねエのかよ？　アー、それとオメエは死刑確定だかな」

「うん！　ミサカはミサカは喜びのあまり死にそうなの！　お礼にダイビングハグー♪」

「十年早エヨクソガキが」

やったあー！　と大声で一方通行に跳びつき、怒鳴られている打ち止めを微笑ましく、そして羨ましく思います。同じ素体ベースなのに、自分にはない彼女の自由で、天真爛漫な姿が眩しくて、少し……妬きますね。でも、上位固体が喜ぶのはやぶさかではありません。

「（十歳ならいいんですか？　とツツコミたいですけど、命を危険に晒したくないので黙っています）よかったですね打ち止め？　ではミサカは留守番をしています。と、少し羨ましかったりしているとは決して口には――」

二人が居なくなったら失意体前屈をしよう考えていた私に彼は『何を言ってるんだ？』みたいな顔をして当たり前のように次の言葉を続けました。

「アア？　オマエも行ンだろ？」

――学園都市出入り口――

「アーでも、どうすつかア……俺もオマエらも、貴重な実験体には変わんねーから、外出許可降りねエかもしんねえゾ。まア、そん

ときゃ、スイッチ入れて飛び出しゃいいか」

姉妹でニヤリ♪

「大丈夫！（と）ってミサカはミサカは（ミサカは）サムズアップ！（します！）」

「アア？ まあそういうなら……ッて！？ 許可降りてンじゃねエか！！？」

「ミサカネットワーク MNWは偉大です！！」

「……（こいつらヤリやがったな。学園都市のメインバンクをハッキングしやがった）」

——新幹線グリーン車内——

「ミサカはミサカは！！」

「ああ、広くて楽しい？ そりゃようございましたね」

グリーン車の個室片側の席に足を伸ばして全部を使って座る彼と、並んで座る姉妹達。

「しかし、一方通行の常識を疑います。——泊旅行で200万も下ろすなんて、とミサカは呆れてみます」

「ミサカはミサカは！！」

「そうは言ってもいくら必要かかんねエし、外でこのカード使えるかわかんねエからナ。つか興奮し過ぎだろクソガキ、電車だから景色が動くのは当然だ黙って外でも見続けとけ」

初めての学園外なので興奮するのは分かりますが、過ぎて意味が不明です。

「金持ちなんですね。とミサカはブルジョアが目の前にいること確認しました」

「ブルジョアじゃねエ。色んな実験付き合ってその報酬だよ。元々、物欲なんてねエモンだから金を口座に突っ込んだままとかでいつの間に溜まっただけだ。そういえばゼロが8ッくらいあった気もしたが、面倒クセエから数えてねエ」

「ミサカはミサカは!!」

「ア? 車内販売? 一万やるから好きなもん買ってこい。でも、夕飯あるから喰い過ぎんなよ腹一杯で入なくなっちまって、後で泣いても知ンねエゾ?」

「相変わらず打ち止めには甘々ですね。ちなみに、打ち止めの言葉をどうすればそう理解できるかミサカは説明を求めたい気分一杯です」

「「??」」

ハア…… とミサカは頭を抑え溜め息を吐きましたが、気にしたら負けっばいから諦めました。

……

とある駅前にあるHOTEL INDEX

外からでも簡単に分かるくらい豪華なホテル。タクシーが常に客待ちをして、キツチリと頭の天辺から爪先まで整えたドアボーイが客を迎えている。

よく訓練されたドアボーイは何も考えることなく、疑問も挟むことなく充実に己の仕事をこなす。そしてそれを当たり前のように通り抜ける一方通行と『ありがとー！』と元気良く続く姉妹達。

そして、赤い豪華な絨毯が長々と続き、出迎えお辞儀をするフロントマン。

「いらつしゃいませ。御予約のお客様でしょうか？」

「予約はしてねエ。開いてる部屋はねエのか？」

「あるにはあるのですが、少々お高く付きまして……」

フロントマンが口籠ってしまったのは一方通行の容姿と、後に控えている中学生と幼女の所為、それと空いている部屋の価格も高額だった為。

「あるんならそこでいいわ。いくらだ？」

「ロイヤルスイートで一泊65万ほどかかりますが……」

「なんだその程度か、もつとかかるモンかと思っただけど意外と安いんだな。ほらよ」

ポンと帯封のまま札束をフロントに投げる。想像外の展開に動けないでいると『全部持つてくつもりか?』と諭されたフロントマンは失礼しましたと頭を下げ、金額の確認中に宿帳に名前の記入を求めた。

「まったく面倒クセエ……」

サラサラ

住所：学園都市。-。-。-。

名前：一方通行

名前：打ち止め

名前：

「アー 10385号と書くのもなんだな。これでいいだろ」

——御坂ミヤコ

「それは誰ですか? とミサカは首を傾げます」

『オマエの名前だ。学園外で番号で呼ぶとかへんだろ』と彼は言った。ミサカはミサカとしか思っていなかったし、自分を個別認識するには番号で充分と理解していたし、そこに不便も不思議も感じていなかった。けど……

初めての“お前の名前”というものがとてもとても大事なモノに思えた。

「もしかして末尾三桁の385からミヤコと付けたのですか？ と、ミサカは一方通行の安直な考えに気分が滅入ります。もう少しパーフェクトクールビューティーな名前を――」

そこでもまた、一方通行とミサカの言い争いになるのだが、それを止めたのはフロントマンだった。

「あの…… 少々お尋ねしたいことがあります…… お名前の一方通行と打ち止めとは…… 一体？」

「アアッ？ 苗字が一方で、名前が通行だ。このチビは苗字が打ちで、名前は止めた文句あんのか？ オイ、三下ア…… 俺らが山田太郎とか日本花子とかじゃなきゃアナタサマに何かご迷惑でもオ、お掛けしたりイするんですかア？ グダグダ言うと殺すぞ中年」

「ころすぞお！ とミサカはミサカは凶暴な一方通行のマネをしてみたり」

「やめてください打ち止め。姉妹達としての品位を疑われますよとミサカは忠告してみます」

「ああああありませんッ！！！（ヒイヒイヒイ！！怖いッ！！！！）」

………

とりあえずチェックインを済ませ花鳥園に向かう。三人は兄妹でもあり、恋人同士でもあるように見える不思議な組み合わせ。

入り口で大人二枚と子供一枚の入園券を買うと、打ち止めが『子供じゃないもん！』と叫び『そんなだからクソガキだッてんだよ！』と彼が怒鳴り喧嘩が勃発。ともすれど、目の間に広がる世界に打ち止めの興味は移る。

入り口ではグアグアお尻をフリフリのガチョウや水鳥の群れがお出迎え、ペンギンまでいる。

そして花鳥園最大のウリである、餌付けの体験。喜び勇んで餌を購入して高く掲げるも……

一向に近寄ってこない鳥達。声を掛けても餌を振ってもまったくこない。

「きてくれないねって…… ミサカはミサカは涙目」

「仕方ありませんよ。お姉さま同様に私たちは微弱な電磁波を無意識で出していますから。と、ミサカも本気で落胆しています」

「ハア… ツたく仕方ねエ。餌持ってる」

チョーカーのスイッチを入れ二人の肩に手を置く。すると今までとは状況が一変、多くの鳥が二人に向けて飛来。

「わっ！？ 鳥がいつぱい来てくれたの！ アハッ、くすぐりたい！！ ダメだよ君ばつか食べちゃ！ 凄くこそばゆいとミサカはミサカは感動感激大感激！！」

「あ、頭の上に乗られました。なんだか変な心地よさです。体内電流のベクトルを内側に向けましたね。でも、貴方の大事なバッテリーを使ってしまったていいのかとミサカは滅多にしない心配をしてみたりします」

「まあ、こんくらの能力使用なら問題ねエよ。それにここにきて餌もやれないなんてツマンネエじゃねエか」

オウム、ヨウム、インコに白鳥、ハシビロコウ、その他大勢の鳥を堪能してあるコーナーに到着。

【触れ合いコーナー放し飼いエミュー。この子達と仲良く遊んで上げて下さいね】

ダチヨウのようできて、それより小さい頭高150cm位の二足歩行の鳥類。食欲は旺盛で、餌を持っているのが分かると寄ってきて、餌を強請る。見た目は少し怖いが、大人しい性格の鳥。

「オラ、打ち止めア…… ちょっとヨオ、乗ってみねエかア？ すんげエ面白そうだぜエ」

「ちょ、ちょっとまって！ この鳥凄く怖いんだけど！？ 口の中

真っ赤だしコーとかいつてるしミサカはミサカは後ずさり」

「クカ……ッ！！ 遠慮すんなッて」

こりゃ楽しいことになりそうだ。なんて邪悪な笑みを浮かべ、打ち止めの両脇に手を入れて持ち上げ無理矢理エミューの背中に乗せる。打ち止めは思わずエミューの首に縋りついてしまうが、御坂美琴のクローンでもある打ち止めも同様に微弱電流が放出されているため、エミューの身体を常に電気マッサージしている状態になり、事態を悪化させる。

クエーーーーッ！！

「キヤーーーー！！！！ ミサカはミサかわあああああああ！！」

甲高い声を上げながら爆走するエミュー。

「くかきけこかきくけききこくけきこきかかか—— オマエ最ッ高だぜエエ！ たまんえエエ！！！！ ギイヤはははははははは！！！！！！」

「悪趣味ですねとミサカは呆れてタメ息を吐きます」

「ウルセエてーの。んじゃ、オマエはこうだ」

ジャラララララ

大量のエミュー用ペレットを頭から浴びせ、落下ベクトルを変えて体中に貼り付けさせる。そうなれば当然――

コーーーー！(餌！餌！餌！餌！餌！餌！餌！餌！byエミユー)

「ちよつちよ……ッ!? 制限された大事な能力をこんな事に使うなんてミサカは貴方に呆れええええ——!？」

「うけけけううけけけつけこけかかけ
——ッハハハハハハ！！！！ ダアメだア！
エ！ 最ツ高だねエ！！ 腹がネジ切れるゼエエ」

！！！！ ヒヤ

いいねいいね

.....

-
-
-
-
-
-

-
-
-

「**帰ンぞ**」

「うん！ ミサカはミサカは楽し過ぎて夢みたいだったの！ それでね今度は水族館に行ってみたって、提案してみる」

「そうだなあ。イインじゃねエか？　その後は刺身と焼き魚と煮魚のフルコースだな。ケケケツ」

「酷い人ってミサカは悪辣非道な貴方を非難的な眼差しで

見詰めるの」

「ふゝん……？　　まアいいけどオマエ、オカズ抜きな。米だけ食ってな」

「た、食べる絶対に食べる！　ってミサカはミサカは悔しい想いをしながらも、美味しそうな魚料理を想像して前言を撤回してみたり」

夕日が赤みを増す帰り道、少し離れた位置で二人を眺めている10385号は羨ましいと思っていた。打ち止め自体特別な固体だと理解している。私たち姉妹はそれぞれの固体依存性は高まったけれど、打ち止めほどの単独概念は芽吹いていない。

ミサカは……　この胸が疼く原因がわかりません。微笑ましく思うのですが、胸がチリチリしてチクリと刺さるような痛さは病気でータと照合しても判別できません。

苦しいです。

苦しいです。

助けてください。

ミサカを助けてください――

――オイ

「!？」

「なアーに間抜けなツラぶら下げてんだテメーは。早くこいミヤコ」

トクン……

今心臓が跳ねた感じがします。名前を呼んでもらって、ミサカをミサカの単体として呼んでくれたこと、凄く胸が熱くなって、ほわほわしたような暖かい、なんだかなんだか表情筋が緩んで正常を保っていられないとミサカは……

いえ『ミヤコ』はこれが嬉しいんだと理解しました。

「ミヤコ~~~~! 早くこないと置い行っちゃまうぞおくと、ミサカはミサカは一方通行のマネ」

「おい、打ち止め。俺はそんなガラの悪いツラじゃねエ」

「え〜? こんな顔だよおって顔真似をミサカはミサカはしてる」

目つきの悪い一方通行のマネして、楽しそうに両頬を持ち上げる打ち止め。

「ウソだよー！ ミサカは貴方の顔大好きよ、ってミサカはミサカの大人の女のテクニクに動揺している一方通行に抱きつくの！ えいー！」

「くくッッ！？ ッたく…… ケッ、くッだんねエ」

腰の辺りに抱きつく打ち止めを抱きとめる一方通行。

「今行きます。しかし貴方は打ち止めに甘いですね。だからアクセロリータと言われるんです」

「ああああん！？ なんつつたア！！！！ オイコラ！ いっぺん殺すぞテメエ！」

「五月蠅いセロリですなアクセロリータ。略してセロリ。プゲラ。それと私の名前はミヤコです。テメエではありません。とミヤコは憤慨しながら訂正を求めます」

「知るかアアア！！！！ テメーは今確実に死んだぞゴルア！」

「逃げましょう。とミヤコは打ち止めに提案します」

「提案に乗るよ！ 逃げろー！！！！ とミサカはミサカはミヤコの手を繋いで走り出すの」

駆け出した二人が少し離れてから、一方通行は呟く。

「……ッたく。楽しそうに笑うじゃねエか。アンだけ喜んでんなら……
まア、連れてきた甲斐はあったみてエだな」

影は長くなり、夕暮れの日差しは三人を照らし出す。

手を振り早く来いと促す二人。

今日は少しだけ杖の突く速度が速い一方通行。

打ち止めの奔放な個性は既に姉のそれとは外れ始め、少しずつ成長を続けている。

変わらない変われないと思っている一方通行の悪態を吐く顔も少しだけ微笑んでいた。

そして一万近くいるクローンのミサカの一人が、個性を獲得しミヤコとして歩き出す。

それぞれの個が芽吹く。

個人を尊び。

誰かを憂う。

それは三人の誰もが知らなかった優しい気持ち。

終わり。

（後書き）

始めまして、ぢいるといいます。

今回初めて、とある魔術の禁書目録を書きました。

1万人いるミサカの中にもこのように名前を持つ姉妹達がい
いてもいいのではないかと思ひ書いてみました。

一方通行の優しさが上手に表現できたらいいなあ。なんて思っ
てま
す。

いかがでしたでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1202n/>

ミサカとミサカと一方通行

2011年10月7日18時54分発行